

群 教 セ	G01 - 02
	平27.257集
	国語 - 小

説明的な文章を正しく読み取れる 児童の育成

— 既習事項を生かした『学び方ポイント』の
活用を通して —

特別研修員 植原 芳美

I 研究テーマ設定の理由

本学級の児童の実態を見ると、国語科における既習事項の定着や学習への意欲が他教科に比べ不足している。算数科に比べると既習の学びを使って課題に取り組もうという意識も低く、学びがその場だけで終わっている傾向が見られる。そのため、説明的な文章においても、文章の内容を的確に読み取って要旨を捉えたり、段落相互の関係や文章構成を理解したりすることを難しいと感じ、正しく読み取ることができていない。

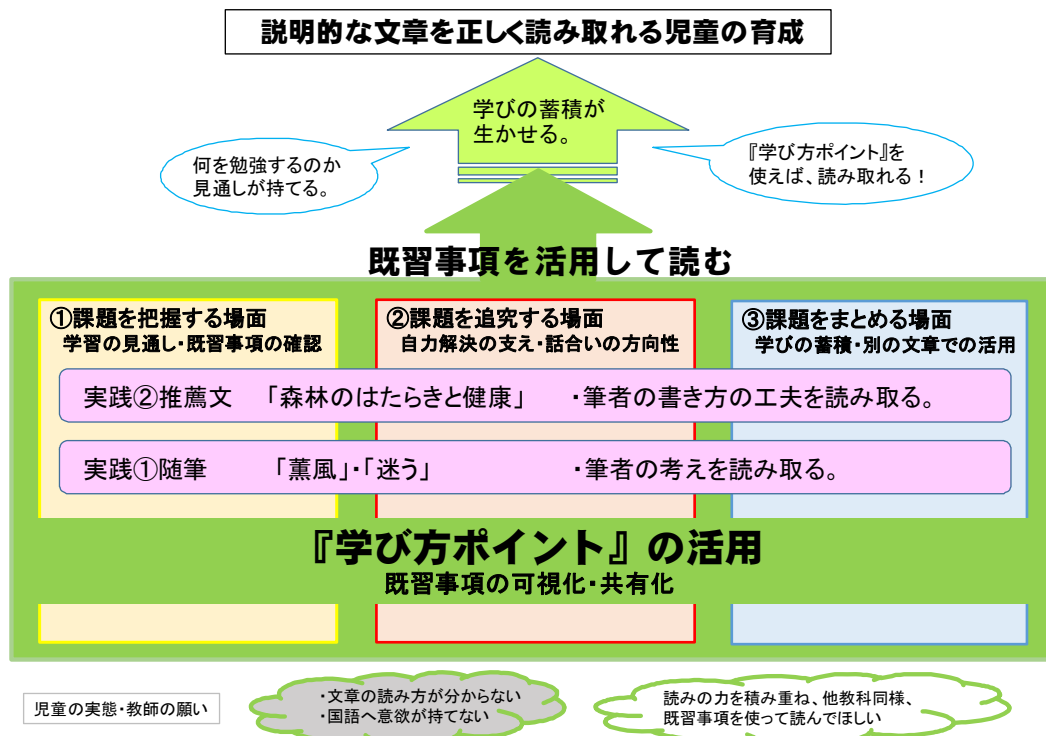
そこで、研究テーマを「説明的な文章を正しく読み取れる児童の育成」とし、そのための手立てとして、ノートに学びの蓄積をしていく『学び方ポイント』を活用することとした。

『学び方ポイント』とは、各自がノートの決められた箇所に『学び方ポイント』として既習事項と新たな学びを書き記すものである。まず、単元導入場面で、単元で学習する事項とそれに関係する既習事項を『学び方ポイント』にまとめ、可視化・共有化することで、学習の意欲や見通しが持てるようにする。そして、学習を進める中で『学び方ポイント』で既習事項を確認したり、新たに学んだ事柄を書き足したりすることで、今までの学びが生きた実感や新たな学びの確認ができ、次の学習への意欲や学びの継続を図る。

このように、『学び方ポイント』を活用することで、児童が自らの学びを自覚し、言葉や文章構成の役割に着目して、系統的に蓄積した既習事項を使って文章内容を読むことで、説明的な文章を正しく読み取ることができると考え、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

説明的な文章を正しく読み取るための手立てとして、ノートに学びの蓄積をして既習事項の可視化・共有化を図るため『学び方ポイント』を活用した。

【『学び方ポイント』の活用】

(1) 課題を把握する場面

学習の見通しを持たせるために、学習課題を把握する場面において、課題を解決するに当たり必要であろうと思われる既習事項を『学び方ポイント』として作成させ、全体で確認する。

(2) 課題を追究する場面

①学習課題を自力解決するための一助とするために、課題を追究する場面において、『学び方ポイント』で既習事項を確認する活動を取り入れる。

②話し合いが一定の方向に向かうように、意見交流の場面において、発表の根拠として『学び方ポイント』を活用したことを発表の根拠とさせる。

(3) 課題をまとめる場面

学習したことを振り返り定着させるために、課題をまとめる場面において、新たに学んだ事柄やさらに分かったことを『学び方ポイント』に加筆する活動を取り入れる。

6月の授業実践1では、単元「随筆を読んで、経験をもとにして書こう」（教材名 「薫風」・「迷う」）において、筆者の考えを読み取るために、ワークシート形式の『学び方ポイント』を活用した授業改善を実施した。多くの児童は各場面において『学び方ポイント』を活用しながら、筆者の意見を正しく読み取ることができた。しかし、教師側で既習事項をまとめたワークシートへの穴埋め的な活用にとどまり、既習事項を主体的に使いこなす姿は見られなかった。

そこで、10月の授業実践2では、単元「すいせん文を書こう～筆者の書き方の工夫を読み取って～」(教材名 森林のはたらきと健康)において、『学び方ポイント』を児童自身の発言を生かしてまとめ、各自のノートに自分たちで記入する形式に変更した。このことにより、児童それぞれが大切であると感じた事項を記入するなど、『学び方ポイント』に個人の独自性も生まれた。また、全体で確認し合うことで既習事項が可視化・共有化され、活用して、筆者の考えを正確に読み取ることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 三つの場面で『学び方ポイント』を活用し、単元のめあてや1単位時間の課題を確認する際、併せて既習事項の確認を意図的に入れたことで、児童の中に文章構成や文章表現に関する関心が高まるとともに知識も深まり、説明的な文章を正しく読み取ることができた。
- 既習事項を使って読もうという意識が育ち、文末表現や文章構成、段落のつながりや関係、事例や経験と意見との区別、反語など、文章の構成要素に着目して読み取るという読み方が身に付いた。
- 既習事項の可視化、学級全体での共有化、学びの蓄積の確認を繰り返すことで、既習事項を生かしながら読み取るようになり、自力で別の説明的文章でも正しく読み取れるようになった。

2 課題

- 児童の実態に配慮し、『学び方ポイント』はノートに書きためていったが、さらに児童が活用する上で、振り返りやすく、整理保存しやすい、より良い蓄積方法について検討する必要がある。
- 教材研究を一層充実させ、系統立てて身に付けさせるべき内容を明らかにし、『学び方ポイント』で取り上げる事項を精選する必要がある。
- 教科書教材で学んだ内容を振り返り、身に付けた力を活用することができるよう、適切な内容の副教材を確保しておく必要がある。その際、教科書教材と同じようなパターンで構成されているものや、読み取る際に少し工夫が必要なパターンで構成されているものなど、児童一人一人の力に配慮した教材を用意する。

<授業実践>

実践 1

- 1 単元名 「随筆を読んで、経験をもとにして書こう」
教材名 「薫風」・「迷う」 (第6学年・1学期)

2 本単元(題材)及び本時について

本単元は、二つの随筆を自分の経験や考え方と比べながら読み、「経験をもとにして書く」活動を設定している。随筆は、純粋な説明的な文章ではないが、本単元では、「事実や事例と意見との関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらいちたこと」について学習する。自分の経験や考えと比べながら、読み手なりの考えや意見を持って読むことをねらい、次のような手立てを具体化した。

3 授業の実際

単元導入時に、単元のめあてや随筆について説明し、どのような既習事項を使って学習を進めていけばよいか考え、『学び方ポイント』を作成し、可視化・共有化した。

本時は、「迷う」を読み、事例をまとめ、筆者の考えを読み取ることをねらいとした。その際、全員が正確に読み取ることを目指し、以下の三つの場面で既習事項を有効に活用できるように『学び方ポイント』を用いた。

(1) 課題を把握する場面

単元導入時に、筆者の経験や考えを読み取るために、どのような既習事項を使えば良いのか考えさせ、『学び方ポイント』を作成した(図1)。児童は、文末表現や文章構成(序論・本論・結論)、接続語などを挙げた。

本時の導入においても、第一教材「薫風」で筆者の考えを読み取る時に使った文章構成(双括型)、指示語、事例や事実と意見との区別、文末「～のだ」などが書かれた『学び方ポイント』を振り返り、これらを活用して、第二教材「迷う」でも筆者の考えを読み取っていくことを確認した。このことにより、児童は、単元全体の見通しを持つことができたと同時に、これまでの学習経験を想起することができ、文末表現、事例と事実、意見との区別、指示語、接続語、強調の語句、文章構成(序論・本論・結論)(頭括型・尾括型・双括型)などに着目して読めばよいことを理解した。

(2) 課題を追求する場面

『学び方ポイント』を使いながら筆者の考えを読み取る自力解決を行った(図2)。具体的には、『学び方ポイント』にある「事例や事実と意見とを区別する」を確認し、「②段落は筆者が挙げている迷う事例の一つだから、筆者の考えではない」と判断する児童がいた。また「筆者の考えは⑱⑳段落に書いてある」「『それでもやっぱり～だろう。』というところから⑲段落だと思う」「①～⑱段落は迷う事例で、⑲段落は事例のまとめだから、筆者の意見は、『迷うことは大切』だ」と思うなど、『学び方ポイント』にある「意見は後半部にある」という文章構成の特徴や接続語、強調の語句を確認して課題追求に生かしている児童もいた。

意見交流の場面では、『学び方ポイント』を根拠として話し合いを進め、考えを深めていった。

課題を追究する場面 (全体での意見交流の一場面)

- S1: 筆者の考えは、⑱⑳段落に書いてある。後ろだし、『それでもやっぱり～だろう。』と強調している。
S2: ②段落も、接続語『でも』や『～だろう。』とあるから、②段落の『人間はいろいろ迷う』だよ。
S3: 筆者の考えは今まで、最後に書いてあることが多かったから、違うと思うな。



図1 「学び方ポイント」の共有化



図2 自力解決場面

- S4：いつも後ろとは限らないよ。『薫風』は双括型だったし、頭括型の構成もあるよ。
- S5：いや、事例と意見で分けて考えると、②段落は、迷うことの例の一つが書いてある事例部分だよ。
- S6：指示語を見れば分かるよ。『これは』『これが』を見ると①や③の段落とつながることが分かるから、②段落は事例の事実だよ。

このように既習事項を意識し、全員で共有化している『学び方ポイント』を根拠に話し合いが行われたことにより、意見交流が活発になり、話し合っている内容への理解や共感が深まった。

さらに、反語表現から、文字に表れていない省略された筆者の意見を読み取り、理解した児童もいた。しかし、反語表現の言い方を捉えられても、意味や効果などを友達に十分説明できなかった。そこで教師が前学年での学びを想起させたところ、今の学びと既習事項につながった。「反対の意見をわざと言って、自分の意見を強調する」「読み手自身にもじっくり考えてもらうための書き方だった」とまとめる児童も見られた。その後、全体で、反語表現を『学び方ポイント』に加筆した。

(3) 課題をまとめる場面

初めて出合うジャンルであった随筆のつくり、読み方を『学び方ポイント』に加え、本単元での学びが他の随筆を読む活動にも生かせるようにした。

最後に『学び方ポイント』を使った振り返りを行い、筆者の考えを正しく読み取る上でのかぎとなった反語表現

をまとめた(図3)。『学び方ポイント』を活用した読み方を再度確認することで、理解を確実にし、今後の文章でもその役割や効果について考え、読み取る時の判断材料として使えるようにした。

単元学習後、他の説明的文章でも『学び方ポイント』の活用を促し、読み取らせたところ、反語表現に気付き、正しく読み取れた児童が92%であった。

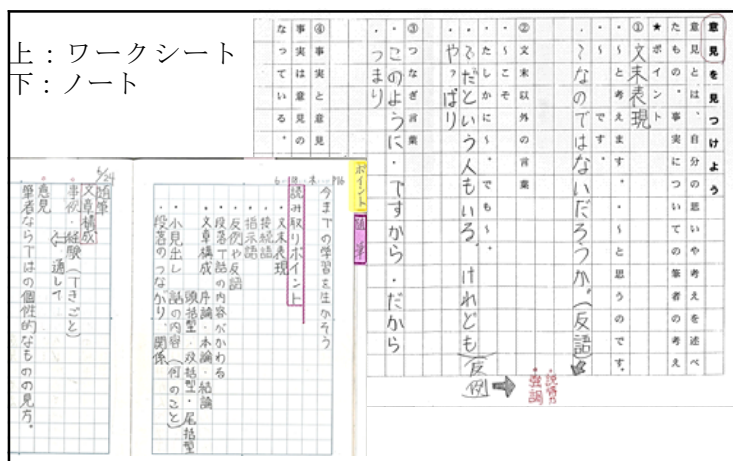


図3 「学び方ポイント」(単元終了時)

4 考察

- 三つ場面での『学び方ポイント』の活用により、事例や事実と意見を整理するために文末表現に気を付けて読んだり、段落相互の関係を捉えるために指示語や接続語の働きを考えて文章を読んだりする姿が見られた。このことから、文末表現、指示語、接続語、文章構成(頭括型、尾括型、双括型)、反語表現、強調語など、児童の中に文章構成や文章表現に関する知識とそれを用いて読むという視点が育ったと言える。
- 導入部で既習事項を可視化・共有化していることで、交流学习での説明や理解が、従来に比べ、スムーズで深まりがあった点からも『学び方ポイント』が効果的であることが分かった。
- 92%の児童が、『学び方ポイント』が「役に立った」「参考にしたり使ったりした」と答えた。理由としては、「忘れていたことを思い出せた」「後で振り返られる」「まとめてあり、すぐ分かる」を挙げている児童が多かった。「意見や構成を考える時に、見て使える」「読む時や考える時のポイントが分かる」「勉強して増えていく」などの意見もあった。活用場面としては、「事例と意見を区別する時」「筆者の意見を考える時」に使ったという児童が多かった。『学び方ポイント』作りは、児童に学びの実感や達成感を持たせることもできた。
- ワークシートにプリントとノートの併用で『学び方ポイント』を進め、既習事項の確認と蓄積を行うことができたが、主体的に活用という点に至らず課題が見られた。より効果的な『学び方ポイント』の作成や活用の仕方を探っていく必要がある。

実践2

- 1 単元名 「すいせん文を書こう ～ 筆者の書き方の工夫を読み取って～」
教材名 「森林のはたらきと健康」 (第6学年・2学期)

2 本単元(題材)及び本時について

本単元では、単元を貫く言語活動に「推薦文を書く」を設定し、読み手を納得させるための説明の仕方の工夫を読み取る。相手を納得させるための資料提示や文章構成、筆者の説明の仕方に着目しながら、筆者の考えを読み取ることをねらい、内容面に感心したり、納得したりする背景には、筆者の論理的な思考や巧みな書きぶりがあることを読み取れるよう、次のような手立てを具体化した。

3 授業の実際

単元導入時に、単元のめあてや推薦文について確認し、どのような既習事項を使って学習を進めていけば良いか考え、『学び方ポイント』を作成し、可視化・共有化した。本時は、読み手を納得させるための筆者の説明の仕方や工夫を理解することをねらいとした。初読の感想を生かしながら、読み手を引き付け、納得させる説明の仕方や書き方を見付け、考えさせる展開を設定した。その際、全員が正しく読み取ることを目指し、以下の三つの場面で既習事項を有効に活用できるよう『学び方ポイント』を用いた。

(1) 課題を把握する場面

まず、推薦文とはどのような文章か、相手を納得させる文章にはどのような書き方や説明の仕方が必要か、既習事項を振り返らせ、『学び方ポイント』を作成した。この活動により、学級全体で学習の見通しと読み取りにおいて着目していく点が明確になった。推薦の定義の確認、文章構成、事例や事実、根拠を書く、問いかける文末表現などの活用や効果を想起し、共有化した。



図4 『学び方ポイント』(単元終了時)

また、これまでに蓄積した『学び方ポイント』を活用させて、教材文の内容、構成を大まかにつかんだ。児童はすぐに、尾活型の文章であること、事実や事例、意見の区別、各段落の働きや大まかな内容、段落関係、そして筆者の考えを正しく読み取ることができた。

(2) 課題を追究する場面

『学び方ポイント』を使いながら、筆者の読み手を納得させる説明の仕方や論理的な文章の書き方の工夫を考える自力解決学習と班や全体での交流学习の場を設定した。まず各自、初読の感想をノート上段に書き、その感想の根拠を筆者の説明の仕方や書き方の工夫に着目しながら考え、下段に書いた。それをもとに班で交流し、考えを深めた(図5)。具体的には、「問いかけや誘い、促しの文末表現だと、文章に引き込まれていく」「『～のです。』『～と分かりました。』と書いてあり、森林の良い働きがいっぱいあると分かった」というように、『学び方ポイント』にある既習事項を根拠にして考えを深めていた。一通り意見が出た後、『学び方ポイント』に沿って再度順番に確認する班や『学び方ポイント』に挙げられていないものはまだないか教材文を読み返す班もあった。その後、班での確認や新たな気づきを学級全体で交流した。その際、「やはり、写真や図があると文章の内容がよく分かる」など、新たに想起した既習事項は『学び方ポイント』に加筆した。



図5 班での学習場面

課題を追究する場面 (全体での意見交流の一場面)

- S1: 森林が体にいい事例や事実が、最近と昔の両方から書いてあって、森林浴をしたくなった。
S2: 「～だけでなく」「～も」と複数の実験が示されると、偶然でないと分かり、本当なんだと納得する。
T: 根拠が複数あると納得できるのですね。

S3：ぼくも森に行って何となくいい気分になったけれど、それがにおいだと、実験ではっきりしたから。
 S4：実験でちゃんと確かめているからね。やり方も順番に細かく書いてあるよね。
 S5：数値があると、2倍も効果があるって、分かりやすい。
 S6：表は数字で、見てすぐ結果が比べられる。表の値を見たら、濃すぎてもだめとよく分かって驚いた。
 T：みんなが気付き考えてくれたことは、根拠に「客観性」があるということです。
 S5：④段落は、「掃除機のような」って書いてあったから、木の葉の働きが分かりやすかった。
 S6：桜餅の例も同じだ。知っていることで言い換えたり、身近なもので説明されたりすると納得する。
 S7：読み手が分かることに合わせて書かないとだめなんだ。読み手のことを考えて書くことが大切だ。

このように『学び方ポイント』を活用することで、話し合いが、相手を納得させるための筆者の説明の仕方に着目するという方向に常に向かっていた。『学び方ポイント』が自力解決の一助となるだけでなく、全体での課題解決のための意見発表の根拠として生かされていた。全体交流の中で挙げられた説明の工夫をまとめ、複数の根拠、実験と数値、筋道立てた説明から「客観性」、身近に感じられる具体例の提示から「読み手意識」を加筆した(図6)。これら『学び方ポイント』を活用した一連の学習を通して、推薦文においては、



図6 学びの可視化・共有化

根拠を明らかにすることや客観性を持たせることの大切さを理解することができた。

(3) 課題をまとめる場面

『学び方ポイント』を使って振り返り、本単元での学びが他の推薦文を読む活動にも生かせるようにした。『学び方ポイント』で、可視化・共有化することで、課題追究の中でたくさん見付けた書き方の工夫の中でも、今回の学習で新たに何を学んだのか、次にどれが使えるようになれば良いかが明確になった。そして、『学び方ポイント』を活用すれば他の推薦文も正しく読めそうだ、という見通しを持つこともできた。また、単元の後半には、読み取った客観性を意識した書き方を生かして書く活動につなげた。

課題をまとめる場面	本時で読み取ったことを使う
S1：書き出しは、やっぱり問いかける型がいいな。具体的な根拠に何を使おうかな。写真は必要だな。	
S2：お薦めの事例や根拠は複数あるけど、S1君がいいと書いているだけだから客観性に欠けると思うな。	
S1：客観性か……。でも、実験はできないよ。どうしよう。	
S2：アンケートとかインタビューをしたら。	
S3：グラフがいいね！調べたことだけでなく、日常生活の中の具体的なことも書いてあって、いいね。	
S4：インターネットのアンケート結果も二つのサイトからで客観性が増すし、数値もあるから大丈夫。	
S6：～が最近多いと書いただけでなく、ちゃんと実際のニュースや記事を引用して書いたり貼ったりしてあるところがいい。	
S5：インタビューはしてあるけれど、「みんな」になっているから、誰に、何人と書いた方がいいよ。	

4 考察

- 『学び方ポイント』を活用することで、相手を納得させるための説明の仕方に着目していくという学習の見通しと目的意識を常に持ちながら、読み取ったり考えたりしていくことができた。そして筆者の論理的な思考や巧みな書きぶりを理解し、筆者の意見を正しく読み取ることができた。
- 今まで書くことに強い抵抗感のあった児童も、『学び方ポイント』を活用し、筆者の書き方の工夫を読み取ったことで推薦文の書き方が分かり、自主的に取り組むことができた。全員が数値や具体的事例のある客観的な根拠を複数入れ、推薦文ならではの文末表現で推薦文を書くことができた。書き上がった文章に児童自身も満足し、既習学習や既習事項を活用していくよさや意義を実感していた。